
Bitter and Sweet

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B i t t e r a n d S w e e t

【Nコード】

N 1 2 3 5 R

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

2月14日 とあるカップルの『バレンタインデー』の出来事。

甘いものがこの世で一番嫌いな『彼』に、それでもバレンタインイベントには参加したい『彼女』は……？

『彼女』視点と『彼』視点、そして二人揃って三人称、とそれぞれで物語が展開します。

2月14日が特別な日になった時から、わたしには悩みがある。

世間ではバレンタインデーだともてはやされるこの日、わたしは世の女の子同様、その日を切っ掛けに好きな人に告白をして、そしてその恋は喜ばしい事に実った。

本当ならチョコと一緒にするものなのだろうけれど、ものの見事に失敗して、結局告白だけになってしまったのに、彼はわたしの想いを受け入れてくれた。

問題は、その彼にある。

その時は単純に両思いになれた事ばかりを喜んだけれど、後々、それが偶然とはいえ奇跡的な事だった事を知る。

というのも 彼は、甘いもの、特にチョコレートが大嫌いだったのだ。

+ + +

俺には、一年でもっとも恐ろしい日がある。

それが2月14日 バレンタインデーである。

世の男はこの日には相手がいるいないに関わらず、落ち着かない気分で過ごす奴もいるだろう。

だが、しかし。俺には恐ろしい以外の何物でもない。

というのも、俺は甘いもの、特にチョコレートが大の苦手だからだ。

+ + +

お菓子が駄目なら、何か…例えばそう、手編みのセーターとか、

マフラーとか？　そういうものを贈ればいいじゃないか、と言う人は多いだろう。

でも、そういうやつを作れる程、残念ながらわたしは手先が器用じゃないし（溶かして固めるだけのチョコで失敗するんだから察して欲しい）、第一…なんかそういうのは苦手なのだ。

だって、確かに気持ちは籠っているかもしれないけれど、逆に言うとなんか相手に自分の気持ちばかりを押し付けているみたいな感じがして。

相手が喜んでくれるなら、確かにそれでもいいかもしれない。

でも、わたしの彼は『バレンタインデー』という日自体を苦手にしてしまっているような人だ。

そんな人に、『バレンタインデーだから』という理由で物をあげるのも、微妙じゃないかと思ったりして。

でも　こんなわたしも腐っても女なので、こういうイベントには参加したいな、と思ったりするのだ。

…さて、どうしよう？

+ + +

こんな俺にも、彼女がいて。

彼女は去年の俺的受難の日に告白してくれた。すごく嬉しかった事を覚えている。

何故なら俺も密かに彼女の事を気にしていたし、しかも　彼女はその日に『告白』だけくれたのだ。

もし、これでチョコレートとかと一緒にしたりしたら、多分断っていたと思う。後で絶対に後悔するのはわかっていても、その日はそういう気持ちにどうしてもなってしまう。

甘いものが嫌いというだけでなくて、すでにバレンタインデーというイベント自体に拒否反応がある俺としては、今年のバレンタインデーは少しばかり恐怖がある。

もし、彼女がバレンタインデーに躍らされて、俺にチョコでも持ってきた日には、何もかもが終わってしまうような気さえする。

去年とは違って、彼女は俺が極度に甘いものが嫌いだという事を知っているから、よもやそんな事をしたりはしないと思う。…思いたい。

どちらかというと、あまり女の子の子してないさっぱりとしたタイプだけでも、彼女も女だ。こういうイベントには弱そうな気もしないでもないから。

これが贅沢な悩みなのは百も承知だ。

ああ、本当にどうしたものか……。

+ + +

そして、運命の2月14日はやってくる。

+ + +

前日、わたしは彼に電話をかけた。

バレンタインデーだから会おう、と言えば、多分喧嘩になるとわかっていいるから、努めて普通に、会う約束を取り付けようとしたけれど、多分、向こうもわかっていいるだろうな。

ちょっとだけ躊躇^{ためら}ってから、それでも『会おう』と言ってくれたのはやっぱり嬉しい。

夕方17時に、彼の部屋にわたしが行く事で話は決まった。

もうこうなったら腹をくくるしかない。

わたしはこの日の為に用意した包みを持って、普段よりも気合いの入った格好をして、部屋を出た。

+ + +

前の晩、彼女から電話がかかってきた。

皆まで聞かずとも、内容はわかったけれど、結局最後まで彼女に言わせてしまった。

曰く 『明日、会えない?』

明日という日が、俺にとってどんな日なのか彼女はわかっているに違いない。だからきつと、『バレンタインデーだから会おう』とは言わなかったのだろう。

ただ、会いたい、とだけ言ってくれたので、俺は内心冷汗を流しながらも、『会おう』と返事をした。返事をする事が、出来た。

もうすぐ彼女はここへとやってくるはずだ。

今まで他のカップルを羨ましいと思った事なかったけれど、今日ばかりは半分情けない思いと共に、羨ましいと思った。

もし、俺が甘いものが好きとはいかなくても人並みに平気で、バレンタインデーを嫌っていなかったら、おそらく今日のこの日、二人でクリスマスくらいに盛り上がったに違いないのに。

でも、子供の頃からの嗜好だし、無理にチョコレートを食べ、寝込んだ覚えまである自分には、どうしてもこの日とこの風習は好きにはなれそうもない。

今ではチョコレートのあの匂いを嗅ぐだけで吐き気まで込み上げる始末なのだ(同様の理由でココアもダメだ)。

そんな事をぐるぐる考えていると、ドアチャイムが軽やかに鳴った。時計を見れば17時を少し過ぎた辺り。

彼女だ。

+ + +

「…お邪魔します」

彼女は何処か緊張した顔で、それだけを言った。

「おう」

彼も彼で、ぶっきらぼうに答えた。言いながらも彼の目は、彼女の手にあるものをじっと見ている。

「なあに？　じろじろ見て」

「え、えつと…いや…その……」

彼女の追及に、彼は引きつった顔でへどもと答える。

彼女が手にしていた包みは、細長い。しかし、バレンタインデー特有のラッピングがなされてはおらず、簡単なものだ。

ついでに、彼女の片手にはいろいろな食材が見え隠れする、近くのスーパールのビニール袋まで下がっていて、あまりにも日常的な姿ではあった。

「今晚はわたしが直々に手料理を作つてあげる」

につこり笑つて、彼女は言う。その理由を想像して、彼の胸はどきりとする。

「て、手料理つて……」

「なによ？　今までも作つてあげた事あるじゃない」

言い返しながら、彼女は勝手知つたる様子でずかずか中に入る。

「今更『食えるのか、それ？』なんて言わないでくれるよね？」

「あ、ああ……」

彼女の軽口に対して、彼の口調はまだ混乱している。

自分が意識しすぎているだけで、彼女はただ普段通りに、会いに来てくれただけなんじゃないか？

と、心の中では思いもするのだが、彼女がわざわざ手料理をするという事自体が非常に珍しい為、納得も出来なかったのだ。

…何しろ、彼女はどちらかというと、不器用な方だったので。

「な、何を作るんだ？」

それでもなんとか話題を繋ごうと、彼は尋ねた。

彼女のレパートリーはそんなにない。多分、あの辺だろうと考えていると、彼女もあっさりと答えた。

「シチュー。…これとカレーはまともに食べられる、って言ったわ

よね」

じとり、と睨まれて、彼は反射的に身を引いた。そんな彼を、彼女はくすくすと笑う。

そして。

「今日は」

「……！」

ついに来たか、と身構えた彼の耳に、彼女の言葉が転がりこむ。

「めでたい、一周年だからね。お祝いしようと思って」

「は？」

予想外の台詞に、彼は素っ頓狂な声を上げた。そんな彼など知った様子もなく、彼女はテーブルの上に食材を並べながら、当たり前のように言う。

「付き合いだして丁度一年でしょ？ 記念日じゃない。だから、ほら」

手に持っていた包みを持ち上げて。

「これ、祝杯用ね」

と、にこりと笑う。

彼はしばし言葉もなく立ち尽くし やがて、盛大に大笑いを始めた。

「は…はは、ははは！！ そ、そか…そうだったよな」

「そうよ。わたし達に、それ以外に何の意味があると言っの？」

彼女は威張ったようにツンと言い放ち、さて、と腕まくりをしながらかキッチンに向かう。

その姿を眺めつつ、彼は今までにない、わくわくするような気持ちを感じていた。

そして、思う。

バレンタインデーも、悪くない。

+
+
+

それは、彼が2月14日を好きになった日の出来事。

（後書き）

HPのバレンタインイベントで突発的に書いたものの再録版です。
すっかりアップするのを忘れていて、バレンタインどころではない
今頃の投稿です（アイタ）

バレンタイン故にらぶらぶを目指したのですが、ちょっと捻り？
を加えて、「チョコレート嫌いな彼氏」のいるカップルのバレンタ
インの話です。

彼女の一人称を「私」から「わたし」に変更した以外は、ほとんど
手を加えておりません。

こういうネタならもつと糖度高めでも良かったなあとは思いますが

（笑）

お楽しみ頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235r/>

Bitter and Sweet

2011年2月22日22時10分発行